北大経営の舵取り四十年
北大初代総長 佐藤昌介―（その2）

佐藤 昌介
Sato Shosuke

「リテラポプリ」とは、ラテン語で「ポプラの手紙」という意味です。北海道大学（及び、その前身である札幌農学校）にゆかりのある人々の言葉を「リテラポプリ」としてお届けします。

開校から十七年を経過した一八九三年、札幌農学校は財政上の問題により、北海道庁の管轄から文部省直轄学校へと改組することが決まる（実際の改組は一八九五年）。一八九四年には、それまでの北海道庁等の行政官が務めていた校長に、農学校教授・校長心得の佐藤昌介（第一期卒業生）が就任する。同時に、農学校教授陣の中心として学生に大きな影響を及ぼしてきた雇い外国人教師がいなくなり、農学校第一、二期卒業生を中心とする教授陣容に切り替わる。この時期、札幌農学校は大きく変化を遂げようとしていた。その中心にいたのが校長佐藤昌介である。

一八九六年七月二五日、佐藤校長は文部次官牧野伸顕に書状を送る。

▼謹呈　時下暑気相募り候処、ますます清適の段、敬賀奉り候。陳ぶるは、この度は図らずも小生進退に関し御高慮を煩わし候段、甚だ不堪汗顔の至りに候。小生事、他へ転職等の義、決して素志にこれ無く、現職に於いて幸いに御信任の栄え蒙り居り候上はあくまで本道農業教育の振興上、又本道の拓殖上に微力を尽したき精神に御座候。只々、浅学菲才をして重責に堪えかね申すべきやと、堪えず恐懼の至りに候。何卒、爾後も相替わらず万端御示教、相蒙りたく願い上げ奉り候。且つ、憚りながら大臣閣下へも微衷の在る処、御序でに然るべく御執り成し下されたく願い上げ奉り候。原道庁長官へも過般、本道農事教育人材養成に就ては、向後、一層尽力仕るべき旨、示し居り候に付、不肖ながら将来ますます精励仕りたく決心致し居り候。現今、実業振興の機運に際会し、殊に拓殖業の進歩顕著にこれ有り候故に、人材の必要は本道に於いてますます其の多きを盛んにし、過般、卒業生農工両学科十七人中両三名を除くの外、既にそれぞれ職に就き、未だ一人も従来の如く中学又は師範等の教員たる者これ無く、偏に機運の然らしむる所にこれ有るべく候えども、実用教育の実用を社会に及ぼすに至り候段、国家のため欣喜に堪えざる次第に御座候。過般は、官等陞叙の御辞令、拝受仕り候。謹んで御礼申し上げ候。

右、念のため、御礼かたがた、重ねて将来の眷顧願い上げたく草々に寸楮を呈し、折角、御自愛祈りたてまつり候　頓首

七月念五日

佐藤昌介拝

牧野次官殿
閣下

（国立国会図書館憲政資料室所蔵「牧野伸顕関係文書」、読み下しと句読点の付加は井上）

本文の大意は次の通り。

「このたびは私の人事のことで心配をかけて申し訳ありません。私は決して転職は希望しておらず、現職（札幌農学校校長）で北海道の農業教育振興と拓殖に尽くしたいと思います。原保太郎北海道庁長官へも北海道の農業教育、人材養成に尽力することを伝えています。現在、実業の振興の機運が高まり、特に開拓事業の進歩が顕著です。従って北海道において人材養成をさらに盛んにしなければなりません。札幌農学校農学科・工学科の卒業生十七人のうち、二、三人を除いて就職しましたが、従来のように中学校や師範学校の教員となった者はいません。これは実業振興の機運によるものですが、実用教育の効用を社会に及ぼすことができるようになり、国家のために喜びに堪えません。」

札幌農学校の教育は高尚に過ぎるとい

目次

リテラポプリ …… 2

北大経営の舵取り四十年
北大初代総長 佐藤昌介―（その2）
大学文書館　井上　高聡

特集：北大は「観光」で豊かさと幸せを創造する …… 4

インタビュー
超学的・超領域的に未知の分野へ
観光学高等研究センター長　石森　秀三

座談会
観光学高等研究センター　佐藤　誠
吉田　順一
敷田　麻実

「観光創造」でつくりだす
多様な価値観が共存できる世界の創造へ
観光学高等研究センター　山村　高淑

地域ブランドづくりと大学
観光学高等研究センター　内田　純一

「観光創造」で学ぶ
観光創造専攻　細川 しおり
臼井　冬彦

施設探訪 …… 15

東京オフィス
文学研究科　鈴木　幸人

虫と石 ❸ …… 16

ウシシルアイヌキンオサムシ
総合博物館　大原　昌宏
変わった形の水晶
総合博物館　松枝　大治

もういちど北大と出会う〈その十三〉 …… 18

北大出身者が持つもの
先端生命科学研究院　小谷　友也

information …… 19

建築設計図が語る北大の歴史〈第13回〉 …… 20

旧札幌農学校図書館読書室・書庫
工学研究科　池上　重康

牧野伸顕関係文書（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

札幌農学校第14期生卒業記念
（1896年7月、北大植物園所蔵）
前列中央が佐藤昌介

う批判は以前から根強くあり、農学校廃止論にまで及ぶことさえあった。佐藤校長は、そうした批判をかわすためにも、実業的人材の養成、農業を初めとする北海道産業への貢献を農学校経営方針として掲げる。書簡でも触れているように、従来は中学校などの教員となる卒業生が多数いたが、この時期から北海道庁技師や植民地官僚・技師となる者、北海道の産業に携わる者が増えていく。書簡中にある十七名の卒業生の中には、鉄道技師から満鉄総裁にまで登りつめる大村卓一、建築物の耐震構造である柔構造研究で著名となる海軍技師真島健三郎、亜麻立枯病研究から帝国製麻株式会社取締役となり北海道実業界で重きを成す平塚直治などがいる。

佐藤校長はこの年の卒業式では「諸子、小成に安せず、益奮励し、嘗て学ぶ所を以て之を実地に応用し、以て国家の隆盛聖明に嘉会に膺ふべし」と述べ、ここでも実業的人材であるべきことを説いている（『学芸会雑誌』第二十一号、読点付加は井上）。

佐藤昌介はこの後三十年以上に渡り北大の経営を担い続け、後に文部大臣となる牧野のほか、同郷の原敬（総理大臣歴任）や同窓の高田早苗（文部大臣歴任）などの中央要路との太いパイプを駆使して、札幌農学校を帝国大学へと昇格させ、北海道帝国大学の開設と学部増設を進めていく。

大学文書館　井上　高聡
Inoue Takaaki